

文化高知

2003年7月 NO.114



「帰郷」
宮下裕史

〈もくじ〉

花いっぱい 街づくり	中川 功	2
ジャズタップとは、音や動きで会話すること①	川村隆英	3
n BOX・過去から未来へ	都築房子	4~5
一人ひとりの人の命を大切に、一つひとつの物の命を大切に	武田廣一	6~7
高知街ラ・ラ・ラ音楽祭	本山卓仁	8~9
木のおもちゃと子ども家具	浜田正志	10~11
夜遊びといえば、蛭狩り	小溝智子	12
かるぽーと初夏の事業のご報告		13
風俗歳時記・風伯		14~15

花いっぱい街づくり

中川 功

南国土佐も夏を迎え、街並みにも活気がみなぎっているように思えます。また、高知市内の電車通り沿いの花壇でも、春から夏へと花たちの化粧直しが行われ、道行く人々の目を楽しませてくれています。

これは、幹線道路を花いっぱいにする花ストリート事業として、高知市が平成十一年から国土交通省の協力を得て、景観整備が完了した国道などでは市内の各種ボランティア団体や一般市民の参加のもと、うるおいとやすらぎの街づくりを展開してきました。今では、歩道のカラー整備と街路樹の植栽もあつて、総合的な美しい景観づくりに一役買っています。

このような背景もあつて、最近各地域で花いっぱい運動が積極的に行われるようになりました。高知市内

美化活動をはじめたのが、この会の原点です。当時若かった会員も今では高齢化していますが、反面、気持ちは若く、高知市を中心として九十歳を筆頭に約百二十名の会員が、花いっぱい運動の種々な行事に参加して頑張っているところです。

現在も行われている行事への参加をいくつか紹介しますと、五輪花壇（丸の内緑地にあり、昭和三十九年の東京オリンピックを記念して出来た）の花の植え替え、電車通り沿いの花ストリート事業による花の植え付けをはじめ、都市緑化祭り（中央公園）での苗木や種子配り、花の写真展示などがあります。

また昨年は、よさこい高知国体が開催されましたが、県外からの役員、選手団を迎えるための「花でのお出迎えゾーン」づくりに参加しました。場所は高知駅北口にある花壇で、八月のはじめ、炎天下で汗をかきました。今思えばいい経験が出来たと思っています。そのほかにも一部の会員ではありますが、それぞれ地域の花づくりリーダーとして、国体の成功に向け、高知市のスローガンであった「ひとりひとりとやく」を全うしたことと思います。

もう一つ、経験した楽しいことがあります。毎年、城西公園で五月三

日から五日まで開催している「高知花フェスタ」への参加です。昨年に続き、創作花壇づくりに挑戦しました。四月三十日の午前、小雨の中で作業を開始、五メートル角の正方形の枠に二千五百ポットの花の苗を入れていきます。あらかじめ決めてあるデザインを見ながら、十五、六人の会員がわいわい言いあつて作業を進めていくのです。今年のタイトルは「花物語り・フラワーアンドミュージック」でした。完成した時の喜びは今でも忘れません。

高知花いっぱい会は前記のほかに、会独自のメイン行事があります。一つは、七月に行われます花の写真展で、回数を重ねるうちに県展、オールドパワー展などに入選者が続々出ています。二つは、今年で三十九回も続いている七草がゆ賞味会で、二月のはじめの日曜日に行われます。つくる楽しみと食べる楽しみの二重効果で、皆さん若いですね。

種々と書いてきましたが、高知花いっぱい会は年代を超えた花の好きな人の集まりです。これからも家族のような気持ちで末永く続くことを……。

（ながわいさお／高知花いっぱい会事務局局長）

ジャズタップライブ、音や動きも会話のハイム①

川村隆英

約半年間準備してきた、高知でのジャズタップライブが終わりました。まず、準備段階から協力してくださった方々や、低予算にもかかわらず東京から来て友情出演してくださったジャズピアノの岩崎佳子さんとジャズベーシストの稲葉国光さん、そしてなにより、無名に等しい私のライブに来てくださったお客さまに感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

今回の高知ライブは、潮江南小学校での全校児童を対象にしたボランティアライブを皮切りに、市内三カ所で行った合計五回（うち一回は追加公演）だったのですが、私にとって郷里である高知でのライブは、やはり特別で、また勉強になったライブでした。

初日、五月二十三日の小学校でのライブは、約五十分間しかなかった

のですが、通常のライブの二日間ぐらいの神経と体力を使ったような気がします。

ライブが始まって約十分間は静かに観ていた子どもたちも、私のトークが始まるとすぐにざわざわし始め、まるでパーティー会場での歓談の時間のようになっていました。そこで急遽トークを中止し、五年生を四名舞台上げて講習会のようなものをやったのですが、そうすると少し興味を持ったのか、やや静かになりました。

それよりもっと意外だったことには、演奏が始まると、子どもたちは水を打ったように静かになり、四百五十名、九百個の目が一斉にステージに集まったのです。子どもたちの集中したときのすごさを見せつけられたような気がしました。決して子どもたちをなめてかかっていたわけ

ではないのですが、ジャズやタップを楽しんでもらおうと事前に考えていた話などには少しも興味を持たなかったのに、ジャズタップやピアノの演奏には興味津々だったのです。そしてライブが終わって、ステージを片付けて帰ろうとしていると、下校中の子どもたちが集まってきて、口々に「楽しかった」とか「おれのタップは最強ぞ!」とか言いながら私の前で足をバタバタさせながら踊るので、説明するよりも実際にやってみせる方が伝わるんだということに改めて気付かされました。

翌二十四日は、十五時から大橋通りの「メフィストフェレス」、夜は十九時からはりまや橋近くの「ハバナ」というカフェで、二十五日は十六時から十八時半から「メフィストフェレス」で、通常私たちが東京をはじめ全国各地で行っているライブを行ったのですが、そこでも興味深い発見がありました。郷里ということもあり、友人、知人もたくさん来てくださったので、どうでしょうか、普段のライブではあまり経験できないことを体験したのです。

それは、お客さんの反応が実にストリートだったことと、終演後、率直な感想とアドバイスをいただけたことです。普段、ライブにいらした

お客さんは、遠慮してか、あるいはジャズタップのことはあまり知らないからとか言って、観て感じたことをあまり言ってくださらないことが多いのですが、高知のお客さんは、それをしてくださったのです。私は、お客さんがジャズタップというものを知っているかどうかは、大切だとは思いません。観て聞いていただいて、楽しんでもらうということが重要なのです。

観客からのアドバイスを嫌う人もいますが、私は大歓迎です。いただいたアドバイスをすべて鵜呑みにするわけではないのですが、それを取り入れることによって、自分では気付かなかったことを修正し、観客により楽しんでもらえるようになると思うのです。

ところで、ジャズタップとはどんなタップなのか？と疑問をお持ちの方もいらっしゃると思いますので、次回お話しさせていただきます。

（かわむらたかひで／ジャズタッププレイヤー）

nBOX・過去から未来へ

都築房子

nBOXと名付けられたこの納屋は、私達家族が生まれるずっと以前、約百年程前からこの地にあり、先祖代々受け継がれてきたものです。しかし、二年前に私達がこの再生に乗り出すまでの長い間、誰もがただ手をこまねいて見ているだけで徐々に朽ちていってしまい、日本中にあるこのような建物と同じ運命をたどろうとしていました。

私達は二〇〇一年の春から、その試みをスタートさせました。それは、百年分のがらくたがうずたかく積み上げられている内部の片付けから始めなければなりません。そこにある物は、長い間に次々と運び込まれ、忘れ去られていった記憶のぬけがらのような感じがしました。それらの品々を一つ一つ確認していく作業の間、ずっと何か腹立たしいような悲しいような気持ちでした。春から夏に季節が移っていくなかで、作業は続けられて、秋までかかってようやくからっぽにすることができました。そこからやっとな壊れている部分の修理に取りかかれるようになりました。屋根や外部の修理は、



太いはりの見えるnBOXの2階部分

素人の私達の手には負えず、仕方なく専門家に依頼しました。実はその年の冬には新しい家族（次男の一家）がそこに引越してくることが決まっていたのです。とりあえず外装を整えることで精一杯で、中は手付かずのまま、家族を迎えることになりました。内部の改装は時間をかけて自分達の手で行うことにして、少しずつ自分達で出来る技術と作業を進めていくことになりました。そしてその年の年末、年始はずっと作業に追われ、二〇〇二年の春にやっとな事務所部分の完成にこぎつけることがで

きました。nBOXの一階の一部分は、デジタルデザインの事務所として機能することになりました。そこで一旦作業は中断され、今回の「アーティスト・ブック展」にむけて再び作業を始めるまでに半年位のお休みがありました。私達にとって古い納屋をただ見栄えのよい状態にするだけのために、再び苦しい作業を始めることは精神的に無理がありました。そこには何らかの目標が必要でした。作業を通して様々なことが私達の胸をよぎり、この空間に流れる過去から未来への人々の想念のようなものを感じてきました。そのうえで、ここを単なる個人の私的空間ではなく、多くの人が集い楽しめる空間にしていくことが、私達に課せられた役割のように考えるようになりました。そこで、「アーティスト・ブック展」を開催しようというアイデアが生まれてきたのです。

自分自身が美術と深く関わってきたこともあり、芸術家による本の制作とその展示というテーマに強く引かれるものがありました。本の形になることで、その芸術家の方々の考え方や感覚を凝縮して見ることが出来るのです。この展覧会には県内外やオーストラリアからも出品があ

り、多種多様な表現を楽しむことになりました。

この展覧会に間に合わせるように、年明けから集中して作業を再開し、何度もこれが限界だと思ってしまう苦

しい日々を経て、展覧会の直前やっとな完成に到りました。

二〇〇一年からの二年間は、私達家族にとつて長く苦しい作業の続く日々でしたが、その間中ずっと納屋



「アーティスト・ブック展」展示風景

と関わってきて、まるで遠い昔の先祖と対話をしているような意識の交流を感じていました。それは時間を超えた意識のつながりで、大きな意味での「愛」ではないかと気付かされました。過去にこの空間の中で営まれた人々の暮らしやその時々喜怒哀楽に対して愛しく思いながら作業を続けてきました。そして、今私達が再生したnBOXについて後の世代の人々が大切に思ってくれることが「愛」なのではないかと思いません。

また一方で、これまでのことを考えると、これは単に私達家族の問題ではなく、広く現代の日本における家のあり方の問題ではないかと思うようになりました。二十世紀を生きてきた日本人は、ひたすら働き、高度成長をめざし、田舎を切り捨て、都会に向かい、新しい便利なものを求め、古い多くの記憶のつまった物を置き去りにして忘れ去ろうとしてきました。私達は全力疾走を続けるうちに何と多くのものを失ってきたのでしょうか。

nBOXでのオープニングの「アーティスト・ブック展」に集まってくださった多くの方々には確かに、こうした私達の想いが伝わったように思われました。田舎で不便で古い



和だんすを展示台に

建物であるnBOXに、私達の子想を超える多くの人々が来てくださったことに感謝するとともに、同じ気持ちで共有できたことに感激しました。

nBOXのnは様々な可能性を持ったnです。この再生された納屋が新しい文化発信地となることで本来の意味での再生が完成すると思いません。私達は物があふれる豊かさではなく、心の豊かさを手に入れることができるはずで、そしてそのことが二十一世紀を幸せな時代にするのだと信じています。nBOXは今、スタートしたばかりです。

(C) 2002 nBOX

さんかく広場の天然酵母パンのプロフィール

(1) 天然の酵母菌が天然のものを食べているから天然酵母パン

さんかく広場が使っているホシノ酵母の「丹沢酵母」は、神奈川県丹沢山塊で採取した野生酵母を培養してつくられ、その酵母菌を発酵させる培養地も小麦や米など天然のものだから天然酵母です。今までのホシノ酵母より一段と味と香りが良い天然酵母です。大量生産と短時間発酵のために化学合成したイーストフードを食べさせるのと違い、天然酵母は数日かけてじっくり発酵させ、パン生地は一晚寝かせます。

(2) ちょっとがたい？パン本来の姿だからです

さんかく広場では、素材本来の良さを活かすことと、化学添加物を使わない製法でパンづくりをしていますので、長くしっとりカフカフさせるためのショートニングという化学合成物も使いません。だから、ちょっとかたくて、3日目にはボンッとした感じになりますが、それが化学添加物を使わないパン本来の姿なのです。冷蔵庫で1週間、冷凍庫なら1~2ヶ月保存ができますので、オープンなどで焼いていただければ、また美味しく召し上がっていただけます。

(3) 主に水田転作田で栽培の国内産ナンブコムギで安全な小麦

輸入小麦は収穫後そして運搬中にも農薬で薫蒸されるそうです。岩手県の東日本製粉で取り扱うナンブコムギは、水田転作田が主な圃場で、作付け圃場を毎年変えると雑草がほとんど生えないので除草剤を使う必要はないし、主に麦藁が元肥で、畜産有機物を使っている圃場もあり、また、病害虫の発生がほとんどないので農薬の散布はしないそうです。

(4) 大豆・卵・牛乳は全く入っていません

パン工房には大豆・卵・牛乳そのものはもちろん、それらを使ったものも、それらが混入したものも一切使っていません。鉄板に塗る油もなたね油しか作らな

いパイプラインで抽出されたなたね油(米澤製油)で、大豆・卵・牛乳が一切混入していないとのPCA検定合格のものです。

(5) 海の恵みてふくらんだ天然酵母パン

太平洋にせりだした高知県東端の室戸岬、その2キロ沖、350メートルの水深から吸い上げたミネラルバランスがよい海洋深層水の脱塩水を使って、天然酵母を発酵させると、酵母菌の数が多くなり、また発酵期間が永くて元気な酵母に育ち、発酵による旨みが保たれ、味や香りがよくなります。さんかく広場の製品には高知の「海の恵み」が入っています。

(6) PCA検定合格のなたね油を使っています

埼玉県熊谷市の米澤製油(株)の無添加なたねサラダ油は、化学添加物を使用しない100%なたね油で、しかも、なたね油専用のパイプラインで製油しています。だから、アレルギー用食品検定センターで「PCA反応により抗原物質(大豆・卵・牛乳)の混入がないことが検定されました」とのPCA検定も合格です。さんかく広場ではパンを焼く鉄板や型枠に塗る油も、このPCA検定合格の無添加なたねサラダ油を使っています。

(7) レーズン、くるみも有機認定で無農薬

さんかく広場が使うレーズン、くるみ、カシューナッツ、アーモンドは無農薬食品などを厳選して取り扱っている「わらぶきの家」から取り寄せています。にんじん、かぼちゃは高知生産者連合からできるだけ無農薬のものを仕入れ、低農薬の場合はそのことを表示します。

(8) 袋もテープも燃やせるものです

袋の素材はポリプロピレンで、燃やしてもダイオキシンは発生しませんので、燃やせるゴミとして出してもらえます。



で発酵させて高知ブランドを加えて今日に至っています。

現在、コープよしだ・かもべ、元氣屋、サンシャイン高須・針木・朝倉、ナチュラルハウス、フライイングピッグ、室戸エコショップ、県庁生協への卸販売、筆山保育園やあいの保育園の給食用に、第一ホテルやアクサンのフランス料理にと、じこじこですがお客が広がっています。

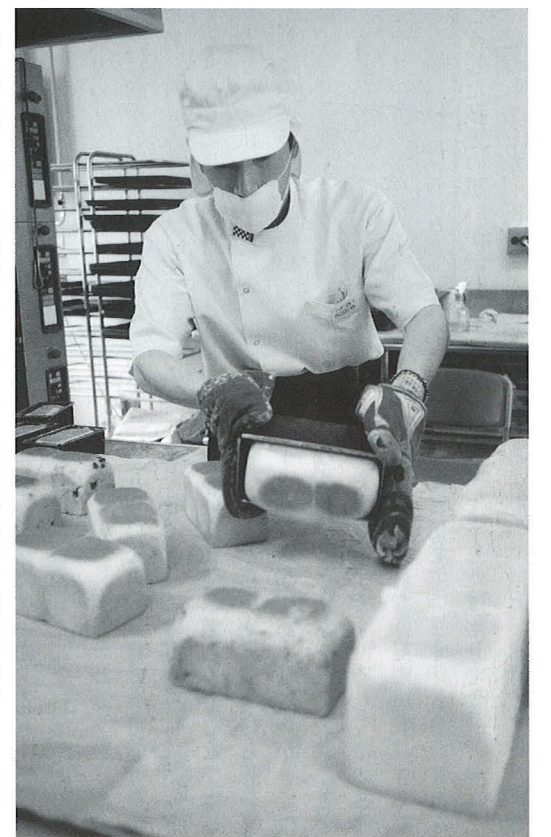
一人ひとりの人の命を大切に、一つひとつの物の命を大切にしながら涙ではなくて美味しさそのものの良さを買っていただけのもので、ぐりにこだわってまいりますので、さんかく広場の天然酵母パンをお買い求めください。

(ただひろかず/社会福祉法人)
さんかく広場常務理事

一人ひとりの人の命を大切に
一つひとつの物の命を大切に
涙ではなくて美味しさを
ものの良さを
買っていただけのもを



武田 廣一



発想の逆転から 天然酵母パンとの出会い

二十年前、東京都町田市で精神障害のある人の地域生活を支援する作業所で働き始めました。精神障害のある人の福祉分野は一九八七年に精神衛生法が精神保健法に改正されてようやく全国的に動き出しましたが、未だヨーロッパの先進国と比べて五十年は遅れていると言われますし、日本では身体障害や知的障害の人たちを対象とした福祉施策とは別の保健衛生施策とされ、その内容も劣り、遅れています。

永い間、医療の対象として病院に隔離され、福祉の谷間にいた精神障害のある人たちへの社会のイメージ

は、「治らない病人」「怖い」「何をするか分からない」「気味が悪い」「こだわりが強い」という否定的なものが大半でした。しかし、私が出会った人たちは、人付き合いは下手で疲れやすいけれど「まじめ」「優しい」「よく気がつく」「嘘がつかない」「律儀」な人たちでした。

私は考えました。

①「社会的に不利な条件にある人にこそ、社会的に価値のある役割を、社会的に価値のある福祉サービスを」。だから福祉施設での障害のある人の仕事は社会的に価値のあるものにして。

②分かってもらいにくい、受け入れられにくいなら、受入の原点「口」から入ろう。すると、市民に分かやすい。毎日口にする食品が良い。

③「病氣」なら「健康」なものを、「怖い」なら「安全」なものを、「棄漬け」にされているなら「無農薬・無添加」なものを。嘘をつく必要がなく、こだわられるものを。

④社会的に「排除」されていたなら、社会的に「必要」とされるようアレルゲン除去食品をつくらう。そして、「涙ではなく美味しさそのものの良さで買っていた」ものをつくらう。

と、探し求めていると、その町田市にホシノ酵母の本社があり、国内産無農薬の小麦を使って卵・大豆・牛乳を使わず美味しい天然酵母パンを製造しているパンやさん「ピッコリーノ」の伊藤幹雄さんに出会い、

海洋深層水を使って 高知ブランド天然酵母パンを

町田市の施設での天然酵母パン製造事業は一定の成功を収め、十年前に郷里である高知に帰ってきてみると二十年前のこの仕事を始めた頃と同じような状況でした。では、高知でもと、全県下からさまざまな方々のご支援をいただきながら、約三年の施設建設「反対」を経て開設された「さんかく広場」でも、天然酵母パンの製造販売を精神障害のある人の仕事として始め、室戸海洋深層水

毎年八月に開催される「よさこい祭り」が高知を代表する夏の風物詩であるのは多くの人の認めるところだろう。全国的には四国の祭りといえば徳島の「阿波踊り」が有名だし、分家であるはずの北海道の「よさこいソーラン」に何かと押され気味(?)の「よさこい祭り」ではあるが、踊り子達の打ち鳴らす鳴子の音に、本格的な炎暑の到来を感じるのには私だけではないと思う。しかし、あまりの存在感ゆえ、「よさこい祭り」が終わってしまうと、街に一足早い秋風を感じるのもまた正直なところではないだろうか？



同じく毎年、仙台市で開かれる「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」という音楽祭がある。プロ・アマを問わず五百以上のバンドが仙台市内の八十もの会場で一斉にライブを繰り広げる一大イベントで、昨年の観客動員数は実に四十五万人！一昨年、宮城国体の視察でその様子を目の当たりにした音楽好きの高知市の職員が、「仙台ではこんなことをやっている」と同じく音楽好きの知人に話したことがきっかけとなって、ある音楽イベントが計画

された。それが「高知街ラ・ラ・ラ音楽祭」である。

お手本の「定禅寺」にならって市街地を舞台とし、「街に融けこむ音楽」「誰もが気軽に楽しめる音楽祭」が旨とされた。何事につけ新しいもの好きの土佐人の反応はすばやく、話は仲間伝いに拡まって、やがて様々な職種から成る実行委員会を結成、計画は具体性を帯びはじめた。特定のスポンサーを持たない有志の集まりだから、協賛金集め、バンドの公募、スタッフ募集、会場の確保、ポスター・パンフの製作、音響機器の手配、関係各所との手続きなど全てが各自手弁当での取り組みとなった。

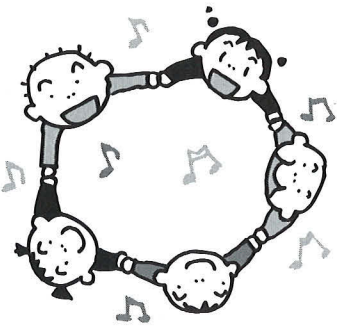
ただ各々に共通していたのは、音楽への情熱と、祭りの後の火が消えたようになつた街を自分達の手で元



気にしたい(だからスポンサー付きは避けなかった)、という思いであった。街の活性化という観点から高知市役所の「まちづくり推進課」が事務局を担当、牽引車の役を担ってくれた。また開催日は高知国体に合

ラララ音楽祭

高知街



本山卓仁

に音量を上げ過ぎるバンドもなければ、熱演のあまり持ち時間をオーバーするバンドもない。懸案のクレームも一件寄せられたがごく穏やかなもので、スタッフ全員でお詫びかたがた説明させてもらって納得して頂いた(と思う)。

痛感したのは観客を惹きつけることの困難さである。見るのも聴くのも無料だから気軽に足を止めてくれる反面、進行が滞ったり、バンドが興味のないジャンルだと、皆さつさと立ち去ってしまうのだ。主催者と

出演者だけが満足しては真の「街の活性化」には程遠い。会場を後にする観客の背中を見送りながらイベントの難しさを実感した次第である。熱演してくれたバンドマンには心から感謝したい。細々とした注意事項にも快く応じてくれたばかりか、演奏終了後「お疲れ様」と声をかけると「こちらこそ有難うございました」と気持ちよく返してくれるので、音楽で通じ合ってる仲間なんだ、と大いに勇気付けられるのだ。



後夜祭として中央公園を盛り上げてくれたゲストの「ブルースファイナルNO.1」の方々にも深くお礼を言いたいと思う。特にアンコールでは、近藤房之介さんのボーカルを妹尾隆一郎さんのハーブ(ハーモニカ)と、内海利勝さん(元キャロル)のギターが支えるという音楽ファンなら聞絶必死の競演を見せてくれた。

むろん問題がなかったわけではない。先の音量へのクレームは他の会場にも寄せられたし、進行の不手際や会場ごとの集客のバラつき、マスコミへのアピール不足など、幾つかの課題が残された。しかし、全体としては概ね好評で収支決算も辛うじて黒字(但し赤字ではないという程度)、どうにか次の開催に繋がる結果を残せたのではないかと一息ついている。全ては温かい目で見守ってくれた観客の皆さんと、関係各位のご理解とご協力の賜物であるの言うまでもない。重ねて深謝の意を表

わけて「歓迎イベント」として設定、より多くの理解と協力を得ることができた。

ポスター・チラシなどでの公募の結果、出演バンドは高知県内のアマチュアを中心に五十、演奏場所は商店街周辺の公園・多目的広場など五ヶ所(中央公園・大丸南口・ひろめ市場・帯屋町公園・アベニュー南口)と決まった。いずれも本家に比べて一桁少ないが、初めての試みとしては妥当な数字ではないだろうか。九月月上旬には各会場のチーフ・スタッフと出演バンドとの打ち合せも実施、いよいよ当日の九月二十二日を迎えた。

大きな不安は二つあった。天候と苦情である。前者は薄曇りという絶好の条件を得たが、後者は終わるまで油断できない。なにしろ市街地の中心での演奏だから、音楽に興味のない方にとっては騒音以外の何物でもないのだ。

開催は午前十一時から夕方五時まで、私が担当した帯屋町公園でも定刻をやや過ぎて演奏がスタートした。やっとなぞ着けたという安堵感とうまくいくのだろうかという心配が交錯する複雑な気持ちだったが、いざ始まってみると進行は拍子抜けするぐらいにスムーズだった。無闇

しておきたい。

さて今年である。昨年の教訓は教訓とし、より充実した音楽祭にすることが我々スタッフの務めだと思っている。実行委員会は四月より始動、すでに打ち合せは四回を重ねている。肝心の今年の開催日は、九月二十八日と決定した。ゲストへの出演依頼も進行している。

皆様方の一層のご理解とご協力をお願いする次第である。どうか第二回の「高知街ラ・ラ・ラ音楽祭」にご期待下さい。

(もとやまたくひと／高知街ラ・ラ・ラ音楽祭実行委員)



子どもたちは一生懸命遊びます。いい顔で遊んでいます。こんな子どもたちの遊び心をくすぐるおもちゃはいろいろあります。このお話の内容です。

子どもにとって一番楽しいおもちゃは何かと思いますか。子どもたちをよく見ていると、水遊びが

とても好きです。お風呂に入ってもなかなか出てきません。泥んこや水溜りでなかなか動かないで困ってしまう。道に落ちていたなんでもないものに興味があつて、いつも目ざとく見つけて遊んでいます。子どもにとって楽しいことは、こうした、手を使って行動したとき

木のおもちゃと子ども家具



浜田正志

に物の形が変わることであり、また、手から伝わる感覚が子どもの新鮮なところにとても気持ちいいことなのでしょう。グニョグニョ、ぴちゃぴちゃ、さらさら……大人にとっては気持ち悪く、とても触れないものでも子どもにとっては気持ちいいものと思えます。軽かったり重かったり、冷たかったり熱かったり……「変化するおもちゃ」と考えると水や土、石ころ、砂、泥んこなど、子どもたちが見つけて立ち止まるものは、やはり子どもにとって興味津々のものばかりです。この、手を出したくなるような気持ちいい感触と、なんにでも形を変えることのできる、変化する素材としておもちゃがあると、子どもたちはおもちゃの前で立ち止まります。

遊びの素材や道具となるおもちゃ

また、子どもたちの遊ぶ姿を見てみると、何でもひっくり返して親の常識の世界からはるかに超えて自由奔放にとんでもないことを平気でやっています。そればかりか、兄弟や同じ年ごろの友達が集まれば、ギヤーギヤー、ひー、ぎえー、という声が隣近所までひびきわたるのです。その姿を前にして、お母さんは目を

回してしまいか、呆然とするしかないのです。こんな子どもたちの遊びの中で、子どもたちのたくましい発達の力が生まれています。おもちゃは、この豊かな遊びをさらに深めるための遊びの道具としての役割があるのです。なかよしライブラリーのおもちゃは、いつも子どもたちの遊びの素材や道具として使っていただけのようにデザインしています。

おもちゃをデザインするときを考えていることは、①手を出せば動き、変化させることが楽しい。②毎日少しでも上手になれることが楽しい。③友達や大人といっしょに共感できることが楽しい。こんなことを考えながらおもちゃを製作しています。

例えば、たたくと木のいい音が出て、たたき方、ならべ方でいろんな音階が楽しめるおもちゃ。そのうちうまくたたけるようになって、メロディーにもなったりする。

玉を落とすと、木のいい音が落ちていくおもちゃ。玉が隠れるのがたまたまなく不思議に思う小さい年齢からおにちゃんまで幅広く、遊び方を工夫しながらそれぞれの年齢でいつでも使ってくれます。

このように、単純だけど工夫すればいろいろな遊び方ができるおもちゃがいいのではないのでしょうか。遊んで

上手になり、また明日にはさらに上手になる。工夫して工夫してさらに上手になれるおもちゃ。剣玉やヨーヨーなどの昔のおもちゃも、そう考えると納得いくと思います。

子どもたちの生活の様子を見てみると、目を覚ましたらとにかく腹ごしらえして、満足すればただちに遊びが始まります。なんだか生活そのものが遊びという毎日のように思えます。家の中の子どもたちはいつも大人の視線よりも低い視線で生活していますので、子ども独自の世界があると思います。大人が腹ばいやお馬をしてみるとよくわかります。

子どもにとっては生活そのものが遊びですから、食事もお風呂も楽しくて仕方ありません。小さいころから言うことを聞かないのが子どもで



すから、まず遊びを生活の中にしてから、位置づけていただきたいと思えます。朝起きてから寝るまで、それぞれの場所での遊びの空間づくりが大切です。

絵本や、日ごろ興味のあるビンの蓋など、子どもの大切な遊びの素材と、はさみや絵の具などの遊びの道具の置き場所を、子どもの生活の中につくってあげましょう。子どもにとって生活の環境はとても大切です。もともと散らかっている部屋に慣れると、片付けることなど思いもしませんし、ものを大切にしようとは思いません。

生活環境づくりのための家具

だから、子どものための家具は、とても大切だと考えています。たとえばプラスチックのピカチューのお人形をもらったとします。置き場所がなければ、いつの間にか不燃物になってしまふけれど、ピカチューに居場所となる棚を作つてあげるだけで家族の一員になれるのです。子どもの家具はたくさん必要ないと思えますが、遊びのテーブル、イス、棚、引き出しなどを考えてあげるだけで、家族の一員として居場所ができて、子どもにとって本当に喜んでくれます。



ホームページアドレス <http://wooden-toy.net>

子どものための家具として、使い方によっていろいろ使え、使ううちにさらによくなつていく木の家具をつくっています。たとえば、子どものためのいすは、いすとしてだけでなく、テーブルにも、踏み台にも、さらに舞台やままごとの道具にも変化できるよう考えています。そして、気持ちがよく、形も美しく、子どもたちが思いっきり遊びながら生活を楽しむ道具としての家具を製作しています。子どもの居場所づくり、子どもの生活空間づくりに、子ども家具をおすすめします。

ところで、おもちゃづくりで生計を立てていくのはとても大変でしたが、十八年やってきて、やっと近ごろ何とか生計が立てられるようになってきました。おもちゃ屋さんでは、動く、音のする、光る、を条件に開発されたおもちゃが、テレビの中に出てくる主人公がプラスチックで成型されたものなどが並んでいます。おもちゃのメーカーは利益を上げていかなくてはなりませんし、子どもたちの発育や成長を考えてはいます。

今年の蛍を大切な方と御覧になりましたか？「えっ、蛍？今飛んでいないの？」とお思いになったそのあなた。残念ながら、今年のゲンジボタルの最盛期はもう終わってしまいました。残念ながら、今年もゲンジボタルはまだまだ飛んでいるかもしれません。蛍の恋の季節を毎年見逃してしまおうために、蛍ウオッチングのコツを伝授いたしましょう。

一、五月下旬から六月上旬の最盛期に要注意

ゴールデンウィークが終わって、二週間程したら、そろそろ蛍スポットを確認するパトロールに出かけましょう。「一番蛍」は、午後七時四十分ごろに光り、多くなるのは午後八時十分から三十分にかけてです。この時間帯……丁度飲み会の二次会への移動時間に当たり、粋な幹事が二次会の趣向として蛍の群れ飛ぶ場所へ皆をタクシーで連れていってくださったことが、私の蛍に夢中になるきっかけでした。

二、闇夜をねらえ

蛍パトロールに出かけて、現代の町の灯がいかにも明るいかを思い知る

ようになりました。家の灯り、街灯、自動販売機、そして月光にさえ蛍の光は負けてしまうのです。一番美しく蛍を見たければ、月齢をチェックして、月が遅く出る日を選んでみましょう。

夜遊びといえば、蛍狩り

小溝 智子



ほしほし
ほしほし
ほしほし

の電光のように瞬いて美しく、とまとして空に横たう天の川の星と区別がつかなくなり、蛍の語源のひとつが「星垂る」であることを再確認させてくれます。そこで、蛍の光の明滅に呼吸を合わせてみてください。自分もその星空とひとつになっっていくような体験ができますよ。

三、ゲンジ、ヘイケ、ヒメボタルは、雄も雌も光る

光は黄緑色。ほんやり飛んでいる蛍は、簡単に手で捕まえられますので、おなか側を見てください。雄は二節、雌は一節の発光器をお尻に持っているのが分かります。しかし、蛍は成虫ばかりが光っているわけではありません。卵も、幼虫も、土に潜ったさなぎの時代も、実は光っているのです。

四、蛍狩りの楽しみ

蛍に取り憑かれ始めた頃、日没から蛍が寝静まる午後十時ごろまで見ていたことがありました。あなたもそうなるかもしれません。そんなところで何時間も何をしているのかと他人に聞かれたら「詩人の魂をもつてして、静かなる時間の美学を追

求している」とでも答えておきましょう。晋の車胤の故事のように、蛍を集めて瓶に入れたら本が読めるのではないかと、三十四ほど集めて実験してみたことがあります。確かに字は読めましたが、蛍の明滅がある上、十時以降は消えていくという欠点に分かって、すぐに逃がしてやりました。

五、蛍は儂い

去年いたからといって、その場所に今年もまた飛ぶとは限りません。水質の悪化、水量の増幅などの環境の変化によって、急に姿を消したりします。毎年毎年同じ場所を訪れて目に見えない環境の変化を蛍の数で感じ取るようになります。

高知市内に住む私が、専ら通っている場所は、土佐山田町の物部川左岸の町田橋近辺や土佐山村の鏡川源流部です。命の洗濯とまではいかなくとも、命の染み抜きができる程度でいいですから、我が高知市内で蛍が飛んでいる場所が増えることを願ってやみません。

(こみぞともこ)

高知市文化プラザ かるぽーと 初夏の事業のご報告

◆心洗われる癒しの合唱芸術——「パツハアカデミー関西」

高知国体に関わった県内音楽指導者を中心設立された「音楽のある街実行委員会」との共催で、五月二十四日、大ホールで「パツハアカデミー関西」高知公演を開催しました。

パツハアカデミー関西は、高知国体で合唱指導を行った本山秀毅氏率いる演奏団体で、京都パツハ合唱団と大阪チェンバロオーケストラにより設立され、今回が記念すべき初の地方公演となったものです。

第一部のパツハのコンサート第一八七番は、より深い理解のもとにお

聴きいただくため、演奏前に指揮者による解説を行いました。高知初のこの試みは、観客の共感を得るとともに、より深い感動を与えました。

第二部は合唱の醍醐味ともいえるアカペラ演奏です。合唱団の実力が一目瞭然に現れてしまうアカペラですが、京都パツハ合唱団の深く豊かな響きは会場中を魅了し、癒しの合唱芸術の世界へと誘いました。

第三部では、ヘンデル作曲「主は言われた」を合唱と管弦楽で演奏し、万雷の拍手の中公演は終了しました。

◆市民吹奏楽団の最高峰——「土気シビックウインドオーケストラ」

六月二十一日には、高知国体で吹奏楽指導を行い、県内吹奏楽関係者から絶大な支持を得た加養浩幸氏率いる千葉県の市民吹奏楽団「土気シビックウインドオーケストラ」高知公演を、同じく「音楽のある街実行委員会」との共催で開催しました。本公演は、市民吹奏楽団の他県における単独公演という事で（全国



あなたダビンチぽくピカソ

初?)、全国の吹奏楽関係者から非常に注目された演奏会となりました。演奏会第一部は、「星条旗よ永遠なれ」のポップスバージョンが始まり、吹奏楽のオリジナル作品や耳慣れたポップスと、肩の凝らない構成でした。第二部では、本年度全日本吹奏楽コンクール課題曲を演奏。コンクール練習真つ只中の中・高校生

の真剣な眼差しが注がれました。映画音楽を中心とした第三部では、出演者も驚くほど観客の反応が良く、途中、蛍光棒を手に大合唱した「大きな古時計」では、会場全体が光り輝く感動的なステージとなりました。

◆市民の美術の広場——「第五十五回高知市展」

六月七日(二十二日)、市民ギャラリー一全室で第五十五回高知市展を開催しました。市展はアンデパンダン(公募・無審査)で、誰でも気軽に出品できる「市民の美術の広場」として親しまれています。初めて出品される方からベテランまで、また、新しいアイデアや技法

の実験場として鑑賞者の反応を見たり有識者の感想を聞くなど、研究の場にもなっています。今年も、ジャンルはもとより年齢もキャリアも幅広い七百七十九点(出品者数六百四十三人)の作品が出品されました。また、北海道北見市からの美術交流作品三十点も、北国からの友好の使節として展示されました。

市展は、県展に次ぐ大規模総合美術展として、発表と鑑賞の場の提供が最大の目的ですが、近年のテーマとして「参加・体験」を掲げており、昨年の開館記念事業に引き続き、美術体感イベント「あなたダビンチぽくピカソ」を開催しました。今年も文化庁文化芸術体験プログラム支援事業の指定を受けてさらにボリュームアップ。六月十五日、北広場や中央公民館で合計十二教室を開催し、延べ二千人の親子がいろいろなジャンルの美術体験に取り組みました。



土気シビックウインドオーケストラ



街の人気者、散髪屋さんの恐竜。ときにはビールを飲んだり、カラオケで歌ったりもするらしい。でも、この骨、丈夫そうに見えて発泡スチロール製だから、台風が来ると飛んでいってしまうこともある。ところで、この恐竜誕生のきっかけは、わが「かるぼーと」での展覧会だったというのがうれしい。

散歩の途中で

風俗

森林環境保護に思う

軒先にまで植えられた植林は鬱蒼として、空は益々狭くなり、村全体が暗い感じになっている。自然林のなくなった山は沈黙の春になる。苔と虫の減った川に魚は住まず、手入れ不足で保水力を失った山は、洪水と早魃を引き起こし、正に山は死んだ状態。植林をなくし広葉樹林にすれば山は生き返

久し振りに田舎へ帰った時、山間からチエンソーの甲高い音を聞いた。植林の伐採が行われていたのだ。手間賃が高騰、外材による安値、人手不足、新建材による需要減、などで植林事業は壊滅状態という話を聞いていた。「山は動かない」状態で、時間だけ経過。

るのだが、切り出しても赤字になるのでは、どうしようもなかった。ところがこのたび「水源税のからみで、補助金が出ることになったので、三十年生の材を出して、反当三十万円じゃあ泣くに泣けんが、放って置いても一銭にもならんき、思い切って切ることにした」がよ」というのだ。新生日本は緑の山から、などという呼び掛けのもと、連日のように杉の子を植えた記憶がある。スローガンに燃えたというより、その内実は、苗木一本に対して支給される報奨金を当てにしていたことだった。当時も補助金が出ていたのだ。電動鋸の響きには、その時々で思惑で左右される山の悲鳴と怒りが感じられる。地響きを立てて切り倒される巨木の梢から、壮大に花粉が舞い上がるのも無理はないと思った。

(3)

賛助会員募集

年会費2000円でどなたでも入会できます

ご入会いただくと……

「文化高知」を年6回お手元にお届けします。

事業団発行の書籍を10%割引いたします。(事業団で直接お求めの場合)



お申し込みは……事業団にお電話でどうぞ。次号に郵便振替の用紙を同封してお届けいたします。

今号の表紙

「帰郷」 宮下裕史
駅に着くと、真っ先に行く場所があった。「おかえり」いつもそう言って喫茶店のおばさんは迎えてくれた。そしていつもクリームソーダを注文した。数年後、喫茶店は閉店した。今日もまた、喫茶店でメニューを見渡す。「えーと、…クリームソーダください」(みやしたひろし 長野県長野市出身)



高知を撮る 第19回写真コンテスト入賞作品

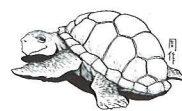
チリ津波の後の須崎湾の惨状 (昭和35年 須崎市) 南海地震に備えよう! 横川宝喜

チリ津波に襲われて須崎湾に家具を流されて茫然と海を見つめる住民。

戦後半世紀、弱小、後進の敗戦国が、「追いつけ、追い越せ」で頑張ってきたのは、当然である。その結果、他人や他国に、競争して勝つことだけを指す習性が、国民の間ですっかり、定着してしまった。受

スローライフ

風俗歳時記



この期に及んで、やれ「産めや殖やせ」だの、「飛び級」だのと叫んでいる時代遅れの世代に較べると、やはり、若者は一歩も二歩も進んでいるようである。(略)

若い人の間にもスローライフが流行り始めたようである。「狭い地球、そんなに急いでどこへ行く」この世の中、ゆっくり、噛み締めて、暮らさじやないか。「若年」にこんな考えが蔓延し始めたのと知って、慨嘆する「熟年」や「老年」も多分に違くない。若者たちが、イタリ、アの車やファッション、食べ物などに惹かれて、その地のスローライフを真似ただけならば、この流行も、ミニスカート、その流行も、ミニスカートのように、一過性で終わることだろう。しかし、この流行が単に、先進国の後追いではなく、我が国社会のうねりを先取りしたものであるとすると、その意味するところは大きい。我が国も、そろそろ、成長は善、デフレは悪というような、単純な「思いこみ」から卒業して、社会も経済も、ゆるやかな「尾根歩き」が楽しめる脇道への分岐点を探すべき時がきているようである。尾根歩きの人数は少ない方がいい。あまり急がぬ方がいい。この期に及んで、やれ「産めや殖やせ」だの、「飛び級」だのと叫んでいる時代遅れの世代に較べると、やはり、若者は一歩も二歩も進んでいるようである。(略)



ニブンノゴ! NIBUNBU SUMMER FESTA 高知公演

8月26日(火) 19:00開演 大ホール

「トーマン団地」として地元高知で爆発的な人気を博し、上京。その後吉本興業との専属契約、ルミネ吉本でのレギュラー出演、「爆笑オンエアバトル」等多数のテレビ番組出演と、お笑いの世界を一気に駆け上がるニブンノゴ!の凱旋公演です。

全席自由 前売り 2,000円(当日2,500円)

7/12(土)
販売開始



Future kiss SUBCULTURE EXHIBITION

8月30-31日(土・日) 13:00~20:00 小ホール

高知県内で活躍する若手芸術家たちによる、テーマやジャンルにこだわらず、時間によってその都度変化しながら続けられていく展覧会の試みです。作品展示やライブパフォーマンスなど、ふだんの展覧会とは少し違った空間をお楽しみ下さい。同日ガレリア大階段にて伊藤キムによるパフォーマンス「階段主義」を開催します。

2日通し券 1,500円

7/12(土)
販売開始



©林風舎

「詩人たちの絵展」高知展

9月2日(火)~26日(金) 10:00~18:00 市民ギャラリー

宮澤賢治、高村光太郎、北原白秋、ヘルマン・ヘッセなど多様な詩人たち15名による絵画作品100点余を集めた展覧会です。初々しい色彩感覚、ふしぎな想像力ー詩人たちの魂の表現をあなたの目でご覧下さい。

一般前売り 700円(当日900円) 高校生以下500円、小・中学生300円(前売り・当日とも)

7/12(土)
販売開始



Musical Freddie ~少年フレディの物語~

9月5日(金) 19:00開演 大ホール

絵本「葉っぱのフレディ」を原作とした、いのちと死という普遍的で大きなテーマをシンプルにすがすがしく描いた感動作。優しく透明感あふれるメロディーで綴られた舞台は、きっとあなたの心に暖かい灯をともします。主演 島田歌穂

S席 3,500円 A席 2,500円

7/12(土)
販売開始



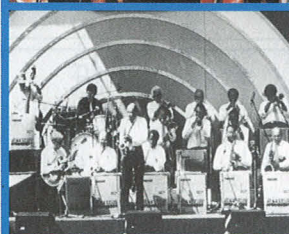
ウィーン・フィルトウオーゾ 高知公演

10月12日(日) 19:00開演 大ホール

名実ともに世界一といわれるウィーンフィルの首席奏者達によって結成された11人の、まさに「小さなウィーンフィル」。室内楽の究極の響きをお楽しみ下さい。

S席 5,000円 A席 4,000円 バルコニー席 3,000円

7/19(土)
販売開始



富士通コンコード ジャズ フェスティバル2003

「ビッグバンド・ヒットソング・パレード」

11月3日(月・祝) 19:00開演 大ホール

ウエストコースト屈指のビッグバンド、フランク・キャップ・ジャガノートにスペシャルゲストシンガーとしてスー・レイニーを迎えた、スタンダードジャズの魅力あふれるコンサートです。

S席 6,000円 A席 5,000円 第2バルコニー席 4,000円 第3バルコニー席 3,000円 第4バルコニー席 2,000円

7/19(土)
販売開始



Photo:長谷川流徳

シルヴィ・ギエム+東京バレエ団「ボレロ」

11月9日(日) 18:30開演 大ホール

100年に1人の才能と称えられ、世界中で絶大な人気を誇るスーパー・バレリーナ、シルヴィ・ギエムと東京バレエ団によるバレエ公演。演目はモーリス・ベジャール振付による「ボレロ」「火の鳥」他を予定しています。

S席 13,000円 A席 11,000円 第2バルコニー席 9,000円 第3バルコニー席 7,000円 第4バルコニー席 5,000円

7/26(土)
販売開始